

竹林抄

星大
911.2
Ti
0

86109



Handwritten red characters, possibly '子' (Shi) and '巳' (Si), written vertically.



竹林抄 注



宗祇

911.2
I

夫連歌の事、平の五七五とみおを方と云ふ
 句、たゞの物也、若れんは、けむくこととて、いり、是、この
 若、序、歌、曲、の、序、の、詩、の、り、て、能、く、能、く、を、聴、く、と、て、
 平、と、云、ふ、は、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、
 多、の、み、お、と、常、行、を、入、り、つ、ま、と、云、ふ、は、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、
 目、今、武、志、に、く、ま、の、初、と、し、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、
 不、立、り、也、や、し、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、
 亦、伴、る、強、く、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、
 へ、り、や、り、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、

いか、この、の、は、く、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、
 火、と、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、
 へ、り、や、り、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、
 初、の、み、お、と、常、行、を、入、り、つ、ま、と、云、ふ、は、な、し、ま、さ、
 ひ、ろ、く、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、
 集、り、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、
 せ、り、或、河、を、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、
 や、り、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、な、し、ま、さ、
 あ、れ、林、十、の、み、お、と、云、ふ、は、な、し、ま、さ、
 修、治、の、み、お、を、付、し、ま、さ、

藻虫齋由己法橋
連歌師主坎法師

竹林抄 發端凡一枚 中七枚
月中凡八枚 今之凡二枚



ニ海ノヨリヨリ道彦ノモリト下ニ竹林ノ別居ニ
法要ノヨリヨリ是ノ心持ノ不連禱ノめテ守リたり
コトナリ

竹林抄卷第一

春

春ノヨリヨリ年ノめテ守リヨリヨリ

尾ノヨリヨリ春ノヨリヨリヨリヨリ 宗御

けりぬん少の年れを愛おしむ一少めゆ
尾と一あぐものうしゆ中にもぬれ尾のま
しひあすもあおる愛のまもるよとてく尾と付
らじまの交葉たしゆしりけむる一しん
あそむいこもあはれ用成のまもる推古春の
まよしゆあ
新毛もゆしゆとま愛る及のまのいしまゆ
あゆむもあゆむしゆしゆしゆしゆしゆしゆ
たしゆの白けしゆのいしゆしゆしゆしゆしゆ
春のうれたれ今てあよめし

うらむまの群のわのぬまをわ橋と
ん橋のまの山の時と本おのまの山とわ
はこのまの山入の龍のわのまの山とわ
つま今まの山とわのまの山とわ

こまのまの山とわのまの山とわ

まの山とわのまの山とわ

まの山とわのまの山とわ

まの山とわのまの山とわ

まの山とわのまの山とわ

まの山とわのまの山とわ

まの山とわのまの山とわ

まの山とわのまの山とわ

まの山とわのまの山とわ

まの山とわのまの山とわ

まの山とわのまの山とわ

まの山とわのまの山とわ

まの山とわのまの山とわ

まの山とわのまの山とわ

まの山とわのまの山とわ

まの山とわのまの山とわ

と云ふるもや煙草と云ふ石川村の住まふ家
石川村の住まふ家の書と云ふ也てそ書み申す
多るたれ如くいざと云ふていづれ

石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家
煙草石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家
石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家
是は煙草と云ふ也

石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家
石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家
石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家
石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家

付らんといふれはあやかし梅の花をいふは
又詩と云ふは練和成歩骨格十句寂まき生涯と云ふ

石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家
石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家
石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家
石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家

天上有星皆拱北辰星之志也山のく移し馬の水
たのしみはありてそをいふは石川村の住まふ家
石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家
石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家

石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家
石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家
石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家
石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家

付らんといふれはあやかし山陽歸雁斜牽夢と云ふは
石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家
石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家
石川村の住まふ家の書と云ふは石川村の住まふ家

年しれきよいといくくくく

美家の高れり侍じのま本 煩

付心高あつてく物増えきつてく
右今序し増え人まわぬ事あき
もれあつてけし

いけりきけしおれあつてみら

あつてあつて年あきつてく後く 取

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

けのまわしきやーあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて 教

物はなほしつらき人今わらふ美家乃月
あはれあはれは筆の片おれは木の花
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき

まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき

まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき

まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき

まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき

まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき

まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき

まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき

まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき
まのよきまのよき見かて又まのよきまのよき

さしむけりし人くさるる世

山後毛と都一告もやとく致

花さく念ひまをさつる若ぬまほく振つる毛
ひらうて山後らゆらたけしひかひとく事
ゆたふらしこの料ありすまひゆき

うらふれぬのちを園十ん

ちうらふれぬのちを園十ん

山後ありもばらうらうらうらうらうらうら
とさしぬまをゆの山後集

山後毛と都一告もやとく致

かさうらうらうらうら

おらぬまをゆの山後集

うらうらうらうらうらうらうらうら

花さく念ひまをさつる若ぬまほく振つる毛
ひらうて山後らゆらたけしひかひとく事
ゆたふらしこの料ありすまひゆき

うらうらうらうらうらうらうらうら

あやうらうらうらうらうらうらうら

付らぬまをゆの山後集

心一の心は業と張ゆをいふやんを
めぞりてふやんをいふ事よしなまの持りて
めやんをいふやの持りてをいふ事よしなまの持りて
しつてふやの持りてをいふ事よしなまの持りて

たふの持りてしつてふやの持りてをいふ事よしなまの持りて
つらぬいふ事よしなまの持りてをいふ事よしなまの持りて

しつてふやの持りてをいふ事よしなまの持りて

たの夜やふらふらとていふ事よしなまの持りて

つらぬいふ事よしなまの持りてをいふ事よしなまの持りて
つらぬいふ事よしなまの持りてをいふ事よしなまの持りて

かみの持りて

人ともいふ事よしなまの持りて

たの夜やふらふらとていふ事よしなまの持りて

つらぬいふ事よしなまの持りてをいふ事よしなまの持りて

つらぬいふ事よしなまの持りてをいふ事よしなまの持りて

つらぬいふ事よしなまの持りてをいふ事よしなまの持りて

つらぬいふ事よしなまの持りてをいふ事よしなまの持りて

つらぬいふ事よしなまの持りて

つらぬいふ事よしなまの持りて

つらぬいふ事よしなまの持りて

付りて大首世も所入滅之語一葉の初と奉て大令
みと終に志報とありて也一入終形激嘆し其
一内件の爲に我南に居眼飛淫槃妙心を執る如
此住門付囑之詞也其の初は也其の終は也
何の世若二葉終と云ふと云ふはし我初一層
色と書てお中と云て終て其の初

神の事と云ふ事の初と終

又て云ふは終と云ふは初と終
終と云ふは初と終と云ふは初と終
初と云ふは終と云ふは初と終
終と云ふは初と終と云ふは初と終

この初と終の初と終

初と終の初と終の初と終

初と終の初と終の初と終
初と終の初と終の初と終
初と終の初と終の初と終

初と終の初と終の初と終
初と終の初と終の初と終
初と終の初と終の初と終

初と終の初と終の初と終

初と終の初と終の初と終

初と終の初と終の初と終
初と終の初と終の初と終
初と終の初と終の初と終

後世の世に言ふ事多し
世に言ふ事多し

世に言ふ事多し

世に言ふ事多し

世に言ふ事多し

世に言ふ事多し

世に言ふ事多し

世に言ふ事多し

世に言ふ事多し

世に言ふ事多し

世に言ふ事多し

世に言ふ事多し

世に言ふ事多し

世に言ふ事多し

世に言ふ事多し

世に言ふ事多し

世に言ふ事多し

世に言ふ事多し

世に言ふ事多し

世に言ふ事多し

みりしとぬんきし
あつたえんもむかひ
しとらとち

いひのんきしとらとち

むかひとらとち

あつたえんもむかひ
しとらとち

あつたえんもむかひ
しとらとち

いひのんきしとらとち

むかひとらとち

あつたえんもむかひ
しとらとち

あつたえんもむかひ
しとらとち

あつたえんもむかひ
しとらとち

あつたえんもむかひ
しとらとち

あつたえんもむかひ
しとらとち

あつたえんもむかひ
しとらとち

いひのんきしとらとち

むかひとらとち

あつたえんもむかひ
しとらとち

あつたえんもむかひ
しとらとち

あつたえんもむかひ
しとらとち

朝あけはつらつとくわあに

秋あけはつらつとくわあに 秋 秋あけはつらつとくわあに

夏

雲の底よりわらわの沖海水

こころはつらつとくわあに の里 如

雲の底よりわらわの沖海水
雲の底よりわらわの沖海水
雲の底よりわらわの沖海水
雲の底よりわらわの沖海水
雲の底よりわらわの沖海水
雲の底よりわらわの沖海水
雲の底よりわらわの沖海水
雲の底よりわらわの沖海水
雲の底よりわらわの沖海水
雲の底よりわらわの沖海水

雲の底よりわらわの沖海水

雲の底よりわらわの沖海水

雲の底よりわらわの沖海水

雲の底よりわらわの沖海水

雲の底よりわらわの沖海水

雲の底よりわらわの沖海水

雲の底よりわらわの沖海水

雲の底よりわらわの沖海水

雲の底よりわらわの沖海水

雲の底よりわらわの沖海水

はるけきつる鶴美しねまの成まなむけし
てともけきつる鶴美しねまの成まなむけし
たのけしつる

おりのけしつる

けしつるけしつる

けしつるけしつる

けしつるけしつる

けしつるけしつる

けしつるけしつる

けしつるけしつる

けしつるけしつる

けしつるけしつる

けしつるけしつる

けしつるけしつる

けしつるけしつる

けしつるけしつる

けしつるけしつる

けしつるけしつる

けしつるけしつる

けしつるけしつる

之と未も多しこも能くわしわ可多き物とて故に
亦多しあはれをた珍たし付く

まねははくわくわく村けりし多きゆり
て外多ゆりやあしあ

うしあしあゆり業乃見

ゆきあゆりのあゆりゆりゆり

ゆきあゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆきあゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆきあゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆきあゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり



ゆきあゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆきあゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆきあゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆきあゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆきあゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆきあゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆきあゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆきあゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆきあゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

是の時の時、神をきく。まの事、神をいふ。命を
かゝり、あけし。まの事、神をいふ。命を

かゝり、あけし。まの事、神をいふ。命を

かゝり、あけし。まの事、神をいふ。命を

かゝり、あけし。まの事、神をいふ。命を

かゝり、あけし。まの事、神をいふ。命を

かゝり、あけし。まの事、神をいふ。命を

かゝり、あけし。まの事、神をいふ。命を

かゝり、あけし。まの事、神をいふ。命を

かゝり、あけし。まの事、神をいふ。命を

かゝり、あけし。まの事、神をいふ。命を

かゝり、あけし。まの事、神をいふ。命を

かゝり、あけし。まの事、神をいふ。命を

かゝり、あけし。まの事、神をいふ。命を

かゝり、あけし。まの事、神をいふ。命を

かゝり、あけし。まの事、神をいふ。命を

かゝり、あけし。まの事、神をいふ。命を

かゝり、あけし。まの事、神をいふ。命を

かゝり、あけし。まの事、神をいふ。命を

かゝり、あけし。まの事、神をいふ。命を

くらみりつらく身をおしし
まけし思し折やくらみりし
あはれなきおの志とくらみりし酒の枯れん
さしちしをさししつらわしといふさくらみり
我れも思草やあつ板ありあつさくらみり
さくらみりしあつらわし

大いみぢのあつらわし

まらやすくらみり折まけり折し教
まらあつらわし折まけり折し教
まらあつらわし折まけり折し教

あつらわし折まけり折し教
まらあつらわし折まけり折し教
まらあつらわし折まけり折し教

まらあつらわし折まけり折し教

あつらわし折まけり折し教
まらあつらわし折まけり折し教
まらあつらわし折まけり折し教

け付たつて若年しうりしめき

あゝのやういあゝいゝゝ

少田より 玉はらけはしとらまゝに

米の漬きしりふきと井のしりふき

父母を漬きしりふきと井のしりふき

陸奥のまゝ玉造はしりふき

けいこうのやめ川 神

まゝののりまゝの玉乃結し 災

ふりのまゝの玉乃結し 災

くろいあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

くろいあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

うらうらうらうらうらうらうら

一村のこゝしの様はらけと

是ははらけのついでに

一村のこゝしの様はらけと

くろいあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

七井のこゝしの様はらけと

ふれん七井のこゝしの様はらけと

七井の漬いあゝあゝあゝあゝ

うけしうあゝあゝあゝあゝあゝ

橘のうららぬ神へ 露のゆらぐ
海にふたふた月の中 物あわす 橘のうららぬ
群のうららぬ 月の中
かたむかへ 雲のうららぬ
ゆらぐ 露のうららぬ 月の中
たけなへ

とや けだく けだく
る 露のうららぬ 月の中
ゆらぐ 露のうららぬ 月の中
せり 但見 露のうららぬ 月の中

うららぬ 月の中
川をゆく 麻のうららぬ 月の中
けのうららぬ 月の中
も 露のうららぬ 月の中
年とく 月の中
まのうららぬ 月の中
雲のうららぬ 月の中
月とく 月の中
露のうららぬ 月の中

ひやうれんちりてし

うらやいぬし 月々々々々

さしよのうかひるのしに おきりり

ふの徳神 なるや なるまふ部 やわらけり

しんかのう 日々々々々

いんまの法女の寺に ありし 曰

ひま 此の部法は なるまふの 高き 國府の 建立や

整世の 梵音の 海潮音を せり ありの 中 なるまふ

音起や 徳神の なるまふ

府より なるまふ

ひのあまの なるまふ 涼に 如

なるまふの なるまふ なるまふ なるまふ

なるまふの なるまふ なるまふ なるまふ

なるまふの なるまふ なるまふ なるまふ

なるまふの なるまふ なるまふ

なるまふの なるまふ なるまふ

なるまふの なるまふ なるまふ

なるまふの なるまふ なるまふ なるまふ

なるまふの なるまふ なるまふ なるまふ

なるまふの なるまふ なるまふ

夕涼言のふらふらとくくいと
如

長中川の清方は下りの付ありし

こくくくくくくくくくく

ふりふりふりふりふりふり

なごの月や夜月をいふ事よもいふ事

たふらふらふらふらふらふらふら

なごの月や夜月をいふ事よもいふ事

おひらひら清方にいふ事よもいふ事

清方にくくくくくくくくくく

なごの月や夜月をいふ事よもいふ事

清方の清方の奥のふらふら

まごの月や夜月をいふ事よもいふ事

清方にくくくくくくくくくく

なごの月や夜月をいふ事よもいふ事

なごの月や夜月をいふ事よもいふ事

なごの月や夜月をいふ事よもいふ事

なごの月や夜月をいふ事よもいふ事

小量たりとせ

秋

しんたにんをく付らんや

行雲をわきとてあふれぬ月をてあて告るや

あつらふありしころへくさのしるし

尤ものもく用うらなしく枯らるる葉

びんは遠つれ萩のあつ月のそよぎし枯らるる花

ちくしとらふあはしきまをまきしけりあせり

夢ありぬ身とてまをく若る花中

蝶のあつれ初りきりな花しげとけ

右 夢ありしころへくさのしるし

海とてあつれしきりあせりあせり

あはれなきをくあつらふしるしとてあつらふ

あはれなきをくあつらふしるしとてあつらふ

あはれなきをくあつらふしるしとてあつらふ

あはれなきをくあつらふしるしとてあつらふ

あはれなきをくあつらふしるしとてあつらふ

あはれなきをくあつらふしるしとてあつらふ

あはれなきをくあつらふしるしとてあつらふ

あはれなきをくあつらふしるしとてあつらふ

あはれなきをくあつらふしるしとてあつらふ

あはれなきをくあつらふしるしとてあつらふ

是し討ちまじりしはひらねのこゝろにありしものぞ
いんまゝに返れりしけりしとみんはひら

はらききりしはひらねのこゝろにありしものぞ

いんまゝに返れりしけりしとみんはひら

はらききりしはひらねのこゝろにありしものぞ

いんまゝに返れりしけりしとみんはひら

はらききりしはひらねのこゝろにありしものぞ

いんまゝに返れりしけりしとみんはひら

はらききりしはひらねのこゝろにありしものぞ

いんまゝに返れりしけりしとみんはひら

はらききりしはひらねのこゝろにありしものぞ

いんまゝに返れりしけりしとみんはひら

はらききりしはひらねのこゝろにありしものぞ

いんまゝに返れりしけりしとみんはひら

はらききりしはひらねのこゝろにありしものぞ

いんまゝに返れりしけりしとみんはひら

はらききりしはひらねのこゝろにありしものぞ

いんまゝに返れりしけりしとみんはひら

はらききりしはひらねのこゝろにありしものぞ

いんまゝに返れりしけりしとみんはひら

うらむもさへししぬるあはれ

たしちまおの佳行の秋の早に佳

秋の早に佳行の早に佳

君神のこころを思ひおのけのまを早

あしとつるい

たのめはまといのこし

風くまに柱をみしりあはれのみ

你同聴凡老竹悲のまの神を能行同は

是下り柱原の老を付めし

まはら秋成む人のうら

^{右馬}秋の口をよめつねとこらしては

ちりおれあると昔もあはれのみ

橋の志あまの月うらま

こらくとわつらうとこらあ

前れらると秋末れを中よむるせり

秋末れうらまのあは

なはれつらとつらと秋のうら

なはれつらとつらと秋のうら

なはれつらとつらと秋のうら

なはれつらとつらと秋のうら

わしの心ざり

あまの月をいづる神

秋して小月よ来りありあやむる神

日回國わよまらるる系りあやむる神

あまの月をいづる神

し移しつゆの神

し移しつゆの神

し移しつゆの神

し移しつゆの神

し移しつゆの神

し移しつゆの神

わしの心ざり

あまの月をいづる神

秋して小月よ来りありあやむる神

日回國わよまらるる系りあやむる神

あまの月をいづる神

あまの月をいづる神

あまの月をいづる神

あまの月をいづる神

あまの月をいづる神

勢くまけいさつ入しこちんし
ふや鶴らわつつこつ新

一社ありやふらりや月夜で 初
ふふふつこちまわき屋から月夜鳴りだす
契てとんち回や台の店

ふ建は月しきれ古寺 順

家の寺たか人音の店とこじやと其やと
岩小月のはやまの町ふ建こちの店とこ
ちまきと也

ら後ふねたしんら後

宿ふ光わらう八月と力と能

又秋の酒ふ千可上かま吾家光といふ
志をせとじゆすとの林

務しふらこの堤日と着て 賢

足ふりまふの京の月の結し

ちあつとびくくくまわら

心のくくらのこよこのおじ久回

武苑上野下野甲斐に流し天子いせり馬
らと月つる連八月十の秋と九月十二の秋と
ちてあしりてあしり

かりいたかしの面影く

世らと秋の如く此奥の底 智

りし結しとひきと様なり時世し信せしと野

山つ奥の底は短くふし程き世の秋は徒風は

はどののさうり富きとりうは

月さのいさむのいさむの秋の音 初

定れいさむとくは柱のきふと秋はひさむ

富き計ふらからすともり

夕日る所りふとれさひしき

柳とゆけし袖く秋の風 敬

後への袖吹るを秋はく名もいひ秋家れひ

みらむは月屋の月よ霜らそ

ははよひのひりひ人若様能

信へのりさして立ちよ秋をいさむひさむ秋

也信は過昭る林はくよあうひ

わらむとふよう秋とこのう秋

推ひう秋の末れと秋にわて 賢

也よ推ひ付合く方ふ

我宿れ者より秋中結て秋れしはあう秋

相らひのるふり

みちしれわりのかきし藤浦水し 如
あまのあをしししあまのさりし藤のむすし
あまのさりしあまのさりし

あまのさりしあまのさりし
あまのさりしあまのさりし

あまのさりしあまのさりし
あまのさりしあまのさりし

あまのさりしあまのさりし
あまのさりしあまのさりし

あまのさりしあまのさりし
あまのさりしあまのさりし

あまのさりしあまのさりし
あまのさりしあまのさりし

あまのさりしあまのさりし
あまのさりしあまのさりし

あまのさりしあまのさりし
あまのさりしあまのさりし

あまのさりしあまのさりし
あまのさりしあまのさりし

日よつてくさくさゆらぐらぐらとまじりぬるはたのけしむ

冬

そしけく大野ふのりあはれ

三笠の杜しーくたつらり

ゆきゆきとくさくさゆらぐらぐらとまじりぬるはたのけしむ

あまのこゝろ

ふたつあはれぬるはたのけしむ

昔大國世王の巫陽其室は巫山の神女をよめる

朝の雲とたりくさくさゆらぐらぐらとまじりぬるはたのけしむ

あまのこゝろ

ととくぬるはたのけしむ

佳下撃 霜林 橙錦 枝々々々

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

ち
おのほはといふ家の柳葉の神のほはよき神のわいり

松のけりふ溪川を水

なやりにのりきうしつりなるを

社

溪橋よの馬とよの地り

しよとねのよりの松まつる馬は河原なるを

所なるぬの節もやうり

ふれいにわらししよころ白を

わらししよふ赤のやうなるを多しゆしはら

えやまのぬのわらししよなるを

月さしよとわらふるを

おのかり袖のころをうり教

おのねのり袖のころをうり日恩のわを

おのりきと袖のころをうりておのかり袖

おのけりねるおのりきとわらふるを

おのけりねるおのりきとわらふるを

おのりきとわらふるを

おのりきとわらふるを

おのりきとわらふるを

おのりきとわらふるを

夕のぬれ竹とわらふる

「流のよにわづれちるおれらよめだん賢
久書び竹のぬれらうとら成中よりおれよておれ
りるおれらよいよ成中よて「流のよにわづれちる
おれらよいよ成中よて」

「書よわづれちる月のよにわづれちる」

「うたよとよおれらよいよ成中よて」

「凡流のぬれらうとら成中よて」
「おれらよいよ成中よて」

「わづれちるおれらよいよ成中よて」

「無語よれはわづれちるおれらよいよ成中よて」

「心のわづれちるおれらよいよ成中よて」
「おれらよいよ成中よて」
「おれらよいよ成中よて」
「おれらよいよ成中よて」

「竹の事案よいよ成中よて」

「おれらよいよ成中よて」

「おれらよいよ成中よて」
「おれらよいよ成中よて」

「海のことたりおれらよいよ成中よて」

「おれらよいよ成中よて」

ひんじのきよとさうりなれり胡のしきつら
枕詞の習はれ新しきと記すの枕詞は
かりとれりつとえられさうわき

二書り野は月とさうりさうわきく 敬

前句の園父王の習流のうされは物大公らの事
うまを物場しりうら西君時く月のせうと
よせせりえりのときよゆとらさう習をたらし

儿格の身かーいんゆらん

白妙のこいさうわきく 田

儿格の帷と云わきはかりをと帷のしきさう

建物ははぬかりかきとわきは物よ儿格と云り
物よはぬかりかきとわきは物よ

そらねくかふとわきかき

物よるつ君のふとらうり 月

馬中放駒羽鳥跡しきく物てし物よ建物
よのきこいさうわきく

さうたよはらう君を打つて 順

遊生の新れ袖は君ととさうさうせ行の時
し袖の君とさうはらうかいたの建物
ゆるこらうとれは袖の君と掛らうに袖

君の清しけりり君よのうらさしは河よけり
とと少ふなるももよ風しとて何すよ
そよ流の河よとせしとてわらり

けりり君よとてわらり

君よのけりりとてわらり

けりり君よとてわらり

君よのけりり君よとてわらり

君よのけりり君よとてわらり

君よのけりり君よとてわらり

君よのけりり君よとてわらり

君よのけりり君よとてわらり

君よのけりり君よとてわらり

君よのけりり君よとてわらり

君よのけりり君よとてわらり

君よのけりり君よとてわらり

君よのけりり君よとてわらり

君よのけりり君よとてわらり

君よのけりり君よとてわらり

君よのけりり君よとてわらり

君よのけりり君よとてわらり

いしよは海を神といふらん 敬

我も地を神のまゝとて多しとて海を神といふらん
いしよは海を神といふらん

君のあはれをいふまじきもの

月も一志のついでに秋の夜初

君のあはれをいふまじきもの月も一志のついでに秋の夜初

ついでに秋の夜初

月も一志のついでに秋の夜初

君のあはれをいふまじきもの

月も一志のついでに秋の夜初

あはれをいふまじきもの

君のあはれをいふまじきもの

いしよは海を神といふらん

我も地を神のまゝとて多しとて海を神といふらん

君のあはれをいふまじきもの

月も一志のついでに秋の夜初

君のあはれをいふまじきもの

いしよは海を神といふらん

君のあはれをいふまじきもの

月も一志のついでに秋の夜初

秋葉の吹くのもりりも詠な死とかり
かゝりたる道にまればあつしつゝのそは詠のそ風

かゝりしこのわのそふす

うゝすよ神なる勢まされるそはゆめ 如

笑つる人のそたなぬあつしは恨しよと秋詠多に
ふられしよこのはらひ使らふのそはつしはと
そのあつしつゝあつしは神なる勢まされるそはゆめ

人のこゝろれあつしはつゝ

あつしはつゝあつしはつゝあつしはつゝ

我らのあつしはつゝあつしはつゝあつしはつゝ

あつしはつゝあつしはつゝあつしはつゝあつしはつゝ

あつしはつゝあつしはつゝあつしはつゝあつしはつゝ

あつしはつゝあつしはつゝあつしはつゝ

あつしはつゝあつしはつゝあつしはつゝ

あつしはつゝあつしはつゝあつしはつゝ

あつしはつゝあつしはつゝあつしはつゝあつしはつゝ

あつしはつゝあつしはつゝあつしはつゝ

あつしはつゝあつしはつゝあつしはつゝ

あつしはつゝあつしはつゝあつしはつゝ

あつしはつゝあつしはつゝあつしはつゝあつしはつゝ

わきうたつたす神の海つ

あう山の神の聖や成の戸に能

あまの御魂とてか神の海に海に海に

わきうたつたす神の海つ

わきうたつたす神の海つ

わきうたつたす神の海つ

わきうたつたす神の海つ

わきうたつたす神の海つ

わきうたつたす神の海つ

わきうたつたす神の海つ

わきうたつたす神の海つ

わきうたつたす神の海つ

わきうたつたす神の海つ

わきうたつたす神の海つ

わきうたつたす神の海つ

わきうたつたす神の海つ

わきうたつたす神の海つ

わきうたつたす神の海つ

わきうたつたす神の海つ

わきうたつたす神の海つ

くらき

かきつるのふりやうと風をうらみまの風をうらみ今もつらう

ほつちもゆふやといふらふ

むきよい筆のうらりらとやうく頃

いづれもものなげらひのやまといふはるの風をうらみ

わづらひとほつちむきよの頃

海を祝のうらむとて我をまねた

わづらひとほつちむきよの頃

わづらひとほつちむきよの頃

星の道もくひを逢りたる人の車もあつた

上の芳れぬおのころのうらむとていづれも

なうらむもれ風をうらむ

わづらひとほつちむきよの頃

前うのいふ風も自らもあつた

いづれもものなげらひのやまといふはるの風をうらみ

わづらひとほつちむきよの頃

わづらひとほつちむきよの頃

わづらひとほつちむきよの頃

わづらひとほつちむきよの頃

わづらひとほつちむきよの頃

早六班女園の願れいなり

留竹のつゝ秋うこねれはの言

冬さきつりしからる仲の路 賢

中流とい琴のまに笛とうふおきあられし七

つとちりしちや十ふれしうこと

のちしつとちやういふ契りさる

毛の譜果かし十ふれしうこととさる

みられしれぬのしうこととせうを秘をくうて發

深しなりそのぬめが秘とくわきてせうきひよとたぬは

くより百南りきうよけ本のいりうし

目を見せりねはうね

かゝ人も病がうりたるとさう受て頂

是の光海氏しゆらんりりいの時古流をうり流し

小月といしりりなうり受えらるおまははなまりの端

いりせぬのをいさしきとくいさのあひの地とせり

かたいつらと源氏なまふらうまうしうしうとてと

なくこの宗人きりう後受てて一月といりり

ほろりのらうりりり

人のいしとてはかきとる

秘めりぬのうしとてかき受てて 砌

先づ人の身をおくしよきまゝの受とていふは
まゝのまゝといふはまゝのまゝといふはまゝのまゝ
まゝのまゝといふは

海の子れいふはまゝのまゝ

雲をいふはまゝのまゝのまゝ

まゝの中へいふはまゝのまゝのまゝ
たつていふはまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝといふはまゝのまゝ

^{新物}まゝのまゝといふはまゝのまゝ

まゝのまゝといふはまゝのまゝ

海川袖のせらたよもいとまゝ

は海袖のせらたよもいとまゝ

布川の海袖のまゝ

まゝのまゝといふはまゝのまゝ

まゝのまゝといふはまゝのまゝ

まゝのまゝといふはまゝのまゝ

まゝのまゝといふはまゝのまゝ

まゝのまゝといふはまゝのまゝ

まゝのまゝといふはまゝのまゝ

まゝのまゝといふはまゝのまゝ

つらりと意のなほとらふ神の御魂を漢に記せん
いさよと海をよほらり

志のあつとちりてん

よとんてんてんてんてんてん 賢

生田のゆいり鴨の歌か歌か生田の女は衆といは
まのあつとちりてんてんてんてんてん

志のあつとちりてん

わらわのあつとちりてん

逢坂川は目と骨とあつとちりてん
おのいせしちり

逢坂の骨とちりてん

あつとちりてん

逢坂の骨とちりてん

逢坂の骨とちりてん

逢坂の骨とちりてん

逢坂の骨とちりてん

逢坂の骨とちりてん

逢坂の骨とちりてん

逢坂の骨とちりてん

逢坂の骨とちりてん

かみしんじいひかきし
そと移るる人しきし中うへ敬
うしなをいひしきしむねあはれ
うしなをいひしきしむねあはれ

うららのとーいあつらふさ
つまかたきさうつーいあつらふさ

陸西と移るる人しきし中うへ敬
とわつたれあはれしきしむねあはれ

うららのとーいあつらふさ
うららのとーいあつらふさ

かみしんじいひかきし
しの契りしきしむねあはれ

うららのとーいあつらふさ
うららのとーいあつらふさ

大和の移るる人しきし中うへ敬
大納言み本はた大下町平七

うららのとーいあつらふさ
うららのとーいあつらふさ
うららのとーいあつらふさ
うららのとーいあつらふさ

名をららりしうゆふるなり
あいのしひよとしらさかぬをく致
うこの慈よりのり
してうらむこれ柳の若ふしうき
いかにあのをく知へし

猿

うらむよわなしそのまを
ひくよまの柳とく柳むく智
今餘の柳とあまはかりかへ柳とあま

あしそのまをさるる人舉柳をくまへし

いかにあのをく知へし
あまはかりかへ柳とあま

うらむよわなしそのまをさるる人
あまはかりかへ柳とあまはかりかへ柳とあま

いかにあのをく知へし

あまはかりかへ柳とあまはかりかへ柳とあま

いかにあのをく知へし

あまはかりかへ柳とあまはかりかへ柳とあま

橋よりハ驛の長しうしが河 能

先ハ光原氏ハ驛の名よりうらやうとさるる者也
橋より下向の時此ハの殿ハ心よりさるる驛
河の長しうらやうと年以てさるる者也
驛長勿驚時變改一葉ハ諸早春秋とさるる者
うせ行て驛長もさるる者也

しうのきまのうけとて

河しやわらうの橋

世懐王(伝)

とて河の橋とてさるる者也
さるる者也

河よりさるる者也
河の橋とてさるる者也
河の橋とてさるる者也
河の橋とてさるる者也

河の橋とてさるる者也

河の橋とてさるる者也

河の橋とてさるる者也
河の橋とてさるる者也

河の橋とてさるる者也

河の橋とてさるる者也

乞ふたの者まゝに体じ接人なれは高きと云ふも
只一眠の中り人して高きと云ふも高きと云ふも
わいらいけりる前るよの卯言部りたり氏能極
此と一白やうふて付らうとあり
銀つちぬまはれ高きと云ふも高きと云ふも
前るよの言みく地まうり

地まうりくひりて高きと云ふも高きと云ふも

極福ろうり高きと云ふも高きと云ふも 敬

その高きと云ふも高きと云ふも高きと云ふも
我身も極福の言みく地まうり

わいらいけりる前るよの卯言部りたり氏能極
わいらいけりる前るよの卯言部りたり氏能極

わいらいけりる前るよの卯言部りたり氏能極

極福の言みく地まうり 石田

心は國のわいらいけりる前るよの卯言部りたり氏能極
善中し高きと云ふも高きと云ふも高きと云ふも
風ふらうり高きと云ふも高きと云ふも高きと云ふも
わいらいけりる前るよの卯言部りたり氏能極
極福の言みく地まうり 石田
極福の言みく地まうり 石田

極福の言みく地まうり 石田

懐枕一敷もめでたき事 敬

いふ山ありき店もくに極秘とくく内をいふ
物成海女も堪くく一敷のりし年月をまごい

ことれこのりふ計を漢力し

舟より夕川の好うく初

けりふふしきりくろ赤白くしていぬし夕川を
お計れ通と愛しきりい好風のりけりすこり

新くう木のりふふしきり

羽夕よとくろや風のけりりな賢

いふ者店くろくろく人袖のむ母とらて新

春のりぬのりふふしきり一敷のりふふしきり

百一人の赤きまきくはまきくはまきく

はまきくはまきくはまきくはまきく

井てくはまきくはまきくはまきく

くはまきくはまきくはまきくはまきく

くはまきくはまきくはまきくはまきく

くはまきくはまきくはまきくはまきく

くはまきくはまきくはまきくはまきく

雁のきくはまきくはまきくはまきく

秋風井初とくろくろくはまきくはまきく

古徳抄のうらむしとてあて能
備中のゆゑあはしくもまたあはれめり
又くまのいずれもあはれ

みづまのうらむしとてあて能
はくしとてあはれ

たるのうらむしとてあて能
はくしとてあはれ
はくしとてあはれ
はくしとてあはれ
はくしとてあはれ
はくしとてあはれ
はくしとてあはれ
はくしとてあはれ
はくしとてあはれ
はくしとてあはれ

いそぎふようえんふんはまはれ
まはれまはれまはれ
まはれまはれまはれ
まはれまはれまはれ
まはれまはれまはれ
まはれまはれまはれ
まはれまはれまはれ
まはれまはれまはれ
まはれまはれまはれ
まはれまはれまはれ

あつまのうらむしとてあて能
あつまのうらむしとてあて能
あつまのうらむしとてあて能
あつまのうらむしとてあて能
あつまのうらむしとてあて能
あつまのうらむしとてあて能
あつまのうらむしとてあて能
あつまのうらむしとてあて能
あつまのうらむしとてあて能
あつまのうらむしとてあて能

あつきの煙をよみおとすらんまのわたり月をよみ

おとす海をよみおとす

枯れしをよみおとす枯れしをよみ

是をよみおとすわが世をよみおとす

よみおとすわが世をよみおとす

いふありくありしをよみおとす

枯れしをよみおとすのりありて

はなかりしをよみおとすのりありて

かゝるありしをよみおとす

おとすありしをよみおとす

花よりよのよをよみおとす

わが世をよみおとすわが世をよみおとす

よみおとすわが世をよみおとす

くしをよみおとす

ハ枯れしをよみおとす

花のよみおとすわが世をよみおとす

よみおとすわが世をよみおとす

よみおとすわが世をよみおとす

あつきの煙をよみおとす

よみおとすわが世をよみおとす

是し付らんや

事よふにまゝに申すべし

車の志のり

くまのり

し折といふ月かき一年のちもたのにおくある困重
法得し使偏くまをくはく文主将取道演有入得此
他無天運汝所くはくくはくくはくくはくくはく
大なる物くはくくはくくはくくはくくはくくはく
あつて付らんといふはくはくはくはくはくはくはく
りあつてひひくはくはくはくはくはくはくはくはく

た
あつて付らんといふはくはくはくはくはくはくはく
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
あつて付らんといふはくはくはくはくはくはくはく
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
あつて付らんといふはくはくはくはくはくはくはく

あつて付らんといふはくはくはくはくはくはくはく

た右のりくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

あつて付らんといふはくはくはくはくはくはくはく

くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

あつて付らんといふはくはくはくはくはくはくはく

しるしありてすくなく

中いづし志あるのみぞあり

鹿野寺のまじり牛のまじり内ものじりも

まじりあやうきまじりあやうき

たよめ神心もあやうき

じしりまじりしり

くまじりあやうき

あやうきまじり

あやうきまじり

かきくまあはら

そしうたはあはら

いりあはら

布とあはら

そしあはら

清のあはら

有れしそしあはら

清のあはら

清のあはら

そしあはら

あはら

風しつろクハふのひんね 210

雲と一鳥とやの秋の千すまり

今も此の神の秘れなきに秘れはふなきにみれ
はやく方れはつらう

うまひてるふかふたの神さひめ

のれはまのころく又は敬

前より王権のひまをけりつひくくぬるがま
と兼のまにむのこをむらひ貝銀の雨の集
とつゆりつとつをけり

神の月をふりまのれの名ふまのりやれ

せいてんりふのまあり

歎と君のこれ田かつ

名と本ううの相ととひ多 賢

前より麒麟のま七行のうの風凰のまは
いれまもあつあつ

ふ日ひるにわのま

信うた杜のまもて風あて

うまふふ日ふあをてはつふのま
うれあやゆをふまうらふをぬり
はやくあつあつ

志のふしよとをばさるれ所

小松さ人のうらむれはまよふれ 砌

少の形傳と志のふしよとをばさるれ所とて今も

小松さ人もあつし

わつしよふかここれじん

いふれうふ清めり水れわと融

あ今の病しをねばふしつらぬれんつれぬるゝの
あつしよとをばさるれ所

夕の道とあふふ車

ふらいつらむとほつしよとをばさるれ所 助

秋光を照車十二家とさつしよとをばさるれ所

うれ神とよとをばさるれ所

あれ風とあつしよとをばさるれ所

志のふしよとをばさるれ所

あつしよとをばさるれ所

あつしよとをばさるれ所

あつしよとをばさるれ所

あつしよとをばさるれ所

あつしよとをばさるれ所

あつしよとをばさるれ所

東江王六望の字に此と乞東望朝事と不
物六時の字と在し不審文佳れ字と念とれ力
りくたかりあり

象とけいり神の

とあり又字のりすくわつれて貫

蜘蛛係取むと云なりといふ昔ゆい人と云人

唐海田くそ煮らるゝ火とて一灯基見ま

とけり即馬基とて之文とゆくと法と既と

寺とけい又けいともしとれたともしとんといひ

昇り方へ向くもむゆ命以れけり中法神法

念多ふとふとありはりて先と初也と云なり

ちり系とけいけいもと云なりと云なりと云なり

と云なりと云なりと云なり

新とつり人ともうかん

ふしとけいこいれすのわく敬

古今の序と大はの書とありとも悟也と云なり

ふのたれ後とてありともいふ事と云なり

けいじもと云なりともいふ事と云なり

しつちりとのやともいふ事と云なり

是意危約下初と云なりともいふ事と云なり

自詠の一書を以てかゝる裁集よらん事とらむ勅
勅の人を以てあそびて入らるる

河をわき渡れぬをまじしむるれは揚子江
ちり勅勅の人を以てあそびて入らるる

四階のりふふのり人
君れめす方とけつふまらるるを賢

大和物産は船楯と四階のり人
あふふやしこせし人

てり月とらはしこせし人
此ふゆらるるを

わがたのりこをこめをこせし人
あふゆらるるを

是はけこ十一字の初出を
園々の里いの川とて又地をく稲田坂と書ば
流りつるよこのたれをのりあせし
系我智の地移して三十一字の初出を
おりのこ又や情をく舞

あせれりよるるを
あせれりよるるを

是はけこ十一字の初出を
胸ちり月とらはしこせし人

いふわいしとわいしとひまゝとぬ梅ら日

我武花のいさゝとぬますと鶴の月とさうと
付より一張のうれ塊の月苗胸とさうと

こくやけりうとさうと

武士のあしひとのあまららひま日

前れとくやけりうとぬますと鶴の月とさうと
前れとくやけりうとぬますと鶴の月とさうと
ぬますとさうとぬますと鶴の月とさうと
ぬますとさうとぬますと鶴の月とさうと

ぬますとさうとぬますと鶴の月とさうと

ぬますとさうとぬますと鶴の月とさうと

うとくやけりうとぬますと鶴の月とさうと

ぬますとさうとぬますと鶴の月とさうと

武士のあしひとのあまららひま日

前れとくやけりうとぬますと鶴の月とさうと
前れとくやけりうとぬますと鶴の月とさうと
ぬますとさうとぬますと鶴の月とさうと

ぬますとさうとぬますと鶴の月とさうと

牛のあしひとのあまららひま日

那ちの鶴大侍人ぬますと鶴の月とさうと
ぬますとさうとぬますと鶴の月とさうと
ぬますとさうとぬますと鶴の月とさうと

ぬますとさうとぬますと鶴の月とさうと

かじりしもの顔の髪のうさぎの如
総角といふ牛角奉れ身は牧草をえり細く髪
かき削り思ふ牛の子に似るともせし前より
かき削りしものうさぎの如く髪をえり細く
かき削りしものうさぎの如く髪をえり細く

かき削りしものうさぎの如く髪をえり細く

かき削りしものうさぎの如く髪をえり細く

かき削りしものうさぎの如く髪をえり細く
かき削りしものうさぎの如く髪をえり細く
かき削りしものうさぎの如く髪をえり細く
かき削りしものうさぎの如く髪をえり細く

内方

琴の神いささかうさぎの如く髪をえり細く

かき削りしものうさぎの如く髪をえり細く

かき削りしものうさぎの如く髪をえり細く

かき削りしものうさぎの如く髪をえり細く
かき削りしものうさぎの如く髪をえり細く
かき削りしものうさぎの如く髪をえり細く

かき削りしものうさぎの如く髪をえり細く

かき削りしものうさぎの如く髪をえり細く

かき削りしものうさぎの如く髪をえり細く
かき削りしものうさぎの如く髪をえり細く
かき削りしものうさぎの如く髪をえり細く
かき削りしものうさぎの如く髪をえり細く

いとふ海と神とをさへ

ひくもこれととほりかたはなから

琴瑟ふかくおとすもぬもよなきうらやまの
のゆきほつやうにさへ

苑とらけはなれらるる

仙人や春と生れとりて

乞禱者として極美れ中々仙人とて春とらるる

舞えんのもこれ又字の古

あこあくる祝れ舞と舞と

前の舞えんと祝のうさくは舞うるに軸と筆

少し外よりあやふくありあぬ難うあ

了りせり乞地名れ也さこあ

さへしとさくも

うらなひにじとくも

心芳なりけはれを今う舞の結とく

結いりしたせりこれ昔とくあ

のうさくともさへ

涙とるる昔れ録とら

石と床たれ仙人の祝

仙文の洞やういふ物と石と床とす

かゝる石座留 洞嵐を拂ひやり 洞をくらし 俗人麻
なり

かゝる石座とらりも さらば かくらりて

石とほくしとわかれし ありも 敬

碁しきしとせし ありしとくし かくその ねむとす

ある 劫盤石 劫能横の 字十まき石と 天人三年

つとて ねむとく 摩長と 一劫と 七枚子 劫日

片手 反はけ 中れ 一はりの こと

石とくし ありとも ありく ありぬ

石と 意に たりる あり 雨ふし 意に 成りて

かゝる石とくし ありとも ありく ありぬ

かゝる石とくし ありとも ありく ありぬ

かゝる石とくし ありとも ありく ありぬ

かゝる石とくし ありとも ありく ありぬ

かゝる石とくし ありとも ありく ありぬ

かゝる石とくし ありとも ありく ありぬ

かゝる石とくし ありとも ありく ありぬ

かゝる石とくし ありとも ありく ありぬ

かゝる石とくし ありとも ありく ありぬ

かゝる石とくし ありとも ありく ありぬ

る業年若りといふ業の二人の末社

さういふ法は子中とよひて

さういふ病れ勢とありて

さういふ海成るといふかかるといふ

さういふてのつとさけりといふ

すわすはつり自創の勢れ勢とあり

るる世といふ

秘のたかきやわらぬ

さういふげいといふかといふ

秘の時といふといふ

い中夫といふといふ

いといふといふ

たまに中れえといふ

入洞月七

いといふといふ

さういふといふ

黙のりといふ

けりといふ黙といふ

の黙出といふ

つといふ

毛黠のらりし身は世の事いふは電の烟の
のありとあらせ又もたれをうたへしとらふし
業もむ黠のらりし心は世の事いふは電の

信しわまはたてしとらふ

わさげりりちの作の敷托とらふ 砌

あられまひれ懐れあられいりりり

あそいけりり飯とる枕懐し物も推れあ

まひ子日成しとらふ

まのりかたれはとらふ玉等 社

簾かたむしとまことと物と目りかたしとせりり

初まれ初子のりれ玉等とらふかたしとせりり

しよわりのたてう髪とらふ

もし初めりるまきとらふの二枚あて

是に秋白髪れらとらふしとらふ神流るは

はらとて一葉一葉の初めら

同じ目しかんぬのわら

物もふらとわらととらふ 敬

天香もとらふしとらふぬめりりりり

中道もとらふの物もはとらふとらふ

物もとらふとらふとらふ

あつていかに思ふところあり

人の手れ又つてつらあつて能

カ祈り成して人かたぬい又祈り申す水神とて

いま初とすれし今ら起店勅詔風水の二用

たは白くしにやとら世中

ははゆらく岩かきあまらん吉野と

けりいふ

世の中はつらあつていかに思ふところあり

あつていかに思ふところあり

世の中はつらあつていかに思ふところあり

あつていかに思ふところあり

世の中はつらあつていかに思ふところあり

あつていかに思ふところあり

あつていかに思ふところあり

あつていかに思ふところあり

あつていかに思ふところあり

あつていかに思ふところあり

あつていかに思ふところあり

あつていかに思ふところあり

あつていかに思ふところあり

こがりの志海と人きまらうとあり

そとふいさうしおせのなを

うやうとらふとある若れ居頃

ひらひらとれうとあり

まひらとせとてあまふいさうとあり

家こと何うよのこらうとあり

よのきよとていとうとあり

ひらひらのたれを結とよま葉嵐のひせとれはひは

ゆとつをへりしあ我とてうと流成つとあり

ひらひらのきよとていとうとあり

くらしくふ橋うとあり

よのきよとていとうとあり

新也
学人の其世とていとうとあり

ま〜とらふとれゆとあり

雑下

老てり幸とあり

ふ〜とらふとれゆとあり

くらしくふ橋うとあり

大東や小堀れとあり

ことのはれくらぬを思ひつらびく

ねのあしりたふしおのやう 唄

たね流よかたれを別よま

昔のこゆしやゆあれえ 敬

つう天伊勢物境のち事せ山科の稼婦のえぬ取
つひいふまうい遊ゆしあけいせう面白く庭と
はこれまうい遊婦あふ若うりそとと家出女ゆ
時紀伊園ふ里の浪もまろちをいそて共い
いふらんしそは業平の羽にれあをまういそを別
てまねれ面白遊娘のうひりそまうい

わのひいしあめそいあつらこたぬ心残かんとくあはれ
まのあつらまうい

ついであふこつらこつら

若あふこれつ伏人のあふ所 能

けしあつらこつ伏人といひいあまては母はあ現
まねあつらこつ伏人といひいあまては母はあ現
いあつらこつ伏人といひいあまては母はあ現
はあつらこつ伏人といひいあまては母はあ現

いあつらこつ伏人といひいあまては母はあ現

あつらこつ伏人といひいあまては母はあ現

夜山にまいて、ちとけりかひ

大いなるこのお方うらや川にまいて、かへりて、けりて、おれ
るを、しとるを、お方うらや川にまいて、かへりて、けりて、

やふわらうらや川にまいて、かへりて、

お方うらや川にまいて、かへりて、

お方うらや川にまいて、かへりて、

ひらぬまて、お方うらや川にまいて、かへりて、

妹うあうらや川にまいて、かへりて、

お方うらや川にまいて、かへりて、

お方うらや川にまいて、かへりて、

よひと、お方うらや川にまいて、かへりて、

お方うらや川にまいて、かへりて、

お方うらや川にまいて、かへりて、

お方うらや川にまいて、かへりて、

お方うらや川にまいて、かへりて、

お方うらや川にまいて、かへりて、

お方うらや川にまいて、かへりて、

お方うらや川にまいて、かへりて、

お方うらや川にまいて、かへりて、

お方うらや川にまいて、かへりて、

ゆめいやくま横川のゆくのかの言

心為物さる光とそ人世と接て横川と霧をせり

天曆の沙門より

行古

即ちこれいそま奥山に横川もあやほふりらん

百五

百五の由のんさこゝゑりてこれいそまのほ

前よりほしとあまほし方さくふらこ

かよふらふらふらうわすれ

ひでかん人のちりささる霧はひの賢

鱗甲れらこいおつらこ三月ちりまはこ

あまらこらこらこらこのを

あまらこらこらこらこらこのを

光海氏の四巻とて琴魁引抄ふらこ

親れいそまゆれまこらこらこらこら

まゆゆわゆゆのこらこらやロラン敬

光と海氏のちりま

岩まらうこのゆくのかの言

約みまこぬれ浦のあまらこらこら

岩まらこぬれ浦のあまらこらこら

約まらこぬれ浦のあまらこらこら

あまらこぬれ浦のあまらこらこら

杖の戸多くくくくくくくくくくくく

伊塔ふいひゆえんれ方のゆせ

いほくの客の行よのきり

お〜よこの世れおもるおめを敬

前ハ何まよるんころよちからん何まよ世れおよ

り孫島〜や川入行るせ

タのちこれ〜せ〜ら乃神

業のつりふとやとむま〜 物

世とて人よ神もはとらして

らの母とさ〜こ〜た〜教よら〜

人しとてとら力よ〜らゆ〜

人よちと枝ぬち〜とぬとち〜とら

高〜ほ〜う〜ぬ〜た〜ふ

かろちとゆ〜〜く親のち〜と人價

或阿親のう〜と〜ま〜は〜く〜人親とさ〜い〜ぬ

かろちとゆ〜と〜く〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ

うたぬらののありよれ後

オ〜〜ら福れ〜い〜あ〜く〜ら〜た〜れ〜と〜く〜物

あ〜は〜れ〜親の〜と〜か〜ら〜ら〜と〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ

人〜と〜う〜ゆ〜ま〜か〜い〜と〜う〜ら

世多きといふもわらわし親も一日

是より先ん接人あり礼親ありのんて

かゝる志し川口の枯れわらわし

むしりる人の心成月をかんで敬

是の矢物終つていささのこゝに母はくはくを

ひきまひらきつるもいささのこゝに母はくはくを

けきののら七物終りて

うられらるをいそて志し

かゝる志し老れわらわし親も一日

是の終りて中く老の氣はくはくを

かゝる志し老れわらわし親も一日

そとくはくをいそて志し

白髪のくはくをいそて志し

是の終りて中く老の氣はくはくを

まればまを立白波の枯れわらわし親も一日

世しわらわしをいそて志し

光のぬれ入るもいそて志し

前毎わらわしをいそて志し

海もまをくはくをいそて志し

句讀のいそて志し

有りてきて小船の棹をて又湖の幸は清濁あるも
一に才海にん方とて水に清
光ぬまにたれたまうの世才と教
始身とたれたまうとてん

例淑よかろう水はとさかり

人乃世も物とあめり乃のさ敬

孝節之戦と競と如源源則踏薄氷とさんらうて

とじてふ才乃也とれた因

と成らうかたをさうひれ故世り 如

去世不孝のいん也

はくさうらうを神とさうん

たうとくもさうらうとさうらうとて敬

がうととかりとていぬとさうらうも神と敬とさうら

・わきさうた庭のたれゆりけ

らうとく一由で清えん乃の向ぬ明

わきさうらうた庭のたれゆりけ 行古

ワきさうらうとさうらうをさうん

たれた人さうた庭のたれゆりけ 敬

よまき今と軍とく道才と顔回乃と又顔路乃

車孔子のありまとさうら

又よれつひ一書うけつる哉
あづらに人なりきたり花をりて曰
人の母もよりとわさちうし

花も人もわさちに散るればはさきたよこひとて
うらさひの極なりよ

よこひんこの母ともうして曰
水涅槃のれもせ

まゝにたのめのもうたなうら

ぬき夜にちよと母のほにわさちて曰
先いぬまこぬの心と物終る時

はつにうけつるのしり月

ゆきとあれくうこにうらなつら

くねりくねるまぬいさしてせつる月
月とあなれともうらなつら

しつらあつらあつらあつらあつら

きつらあつらあつらあつらあつら

ゆきよのつらあつらあつら

あつらあつらあつらあつらあつら

あつらあつらあつらあつらあつら

あつらあつらあつらあつらあつら

我し凡る胸の月の痛きやみく
前白太公望のち身こけり
六能の習の月の影
みせりふれ六月梅鏡の心
と能知る也

せよふりてかつらこいものし

鴛の心唐の園をみけのあ 智

赤野園とく阿含但之の理と
鏡と鴛とくち
十男成佛のし能の妙理と
しけり心也

拙てふふれねかすこたまり

大正殿やけのよりの
新や博吹
傳教大師我立ねの
はちりもいふなり

さつわぬらまかりせしり

わろとを人ことのは乃る物

りるとせちとをく
高とてま日かれ
わろとを橋
負ちれりし
ととをの心也

のありとくくし
の勝り也

後しふかりり部の
うれと人日

是は化城喻品の心也

しよてかられ
もくは海に
もるも
たれ
心よ
たつら
し

わろのしれ
ららるる物

木こまひふをよめふ内々鐘なりて頃
そく光源氏の心

うろくそくりれはのあしき

君代を絶しうのち四の寺日

天子の西祈と東大具袖迄唐国城けさちりり

勅ゆるは

時と志すり入るる後

夕かのみれ清きれ都の助

時と志すりく垣と行るるこの清といふは

ふは冠の清もまた清の清といふは志候の清

志候清大津 粟津七

あしあつやしてなさん

人の態をいほるるの尊敬

治とらぬる人の態をいほるるの尊敬

はねといふ心あり

はまらと佛とらるるのあそび

は家本と御家の本とをくらうるのあそび

はらと我が中れ各他れは神とくまては縁と

はとらるる心あり

竹のこれみりいづるともむ

うせうひるまゝのころ賢
信者もその道にまよひはたしよ衣と神樂を
うけまらむに竹の葉を揃へ

ついでく先ある枝やのみちを

ゆき一本とよとみうこ大田

ゆき一本とよ

天子の御衣とてし

貞観の時表紙の葉あはらう梅れまれば
うら枝の先ある葉をけり

なご枝とよとよののりあるまれば
こいこいみうこむら唐圃

りいこいこいむら唐圃

是の千和道むしうらもあはれ

ま回する君もや神もあはれ

なごり時わはののこ

庭坂の神としの神もあはれ

發句春

花のまをさうあや者野山頂

いほと花のまをさうあや者野山頂
あはれうらむあはれうらむ

かきくゆの神にいしりねお敬

只伝承しあるなりはなほなほ神のやうなり
（梅香）
かきくゆの神にいしりねお敬

りくそんくちいふていりてい

是いおのたきくちいりていりてい
こいへりていりていりていりてい
若れ指くちいりていりていりてい

新ふし星のほきり梅花 賢人

梅たのはほきり梅花のほきり梅花のほきり

池は早より川きりていりていりてい

梅の香きりていりていりてい

因右の神に梅の香きりていりてい

いりてい

梅花きりていりていりてい 曰

昔は梅の香きりていりていりてい

梅の香きりていりていりてい

本れ香きりていりていりてい

梅の香きりていりていりてい
白ひもすりていりていりてい

ま風うり人志くふ柳のま柳
是人の餞のま風うり人志くふ柳のま柳
柳のま風うり人志くふ柳のま柳

こま風うり人志くふ柳のま柳
是人の餞のま風うり人志くふ柳のま柳

ま風うり人志くふ柳のま柳
是人の餞のま風うり人志くふ柳のま柳

ま風うり人志くふ柳のま柳
是人の餞のま風うり人志くふ柳のま柳

ま風うり人志くふ柳のま柳
是人の餞のま風うり人志くふ柳のま柳

ま風うり人志くふ柳のま柳
是人の餞のま風うり人志くふ柳のま柳

ま風うり人志くふ柳のま柳
是人の餞のま風うり人志くふ柳のま柳

ま風うり人志くふ柳のま柳
是人の餞のま風うり人志くふ柳のま柳

ま風うり人志くふ柳のま柳
是人の餞のま風うり人志くふ柳のま柳

ま風うり人志くふ柳のま柳
是人の餞のま風うり人志くふ柳のま柳

夜こらやうていふやうに
やがたよまうとゆふを
しるはての感あり
つらき心
に御金とてと揚と
りてあひらみ
の心
花よ名をきと
まうとて
花の錦よ名
のあつら
ひりて
あひら
まう

あつらひりて
あひらまう
あつらひりて
あひらまう
あつらひりて
あひらまう
あつらひりて
あひらまう

春風暗
剪庭花樹
と云ひ
の心
あつらひりて
あひらまう
あつらひりて
あひらまう
あつらひりて
あひらまう
あつらひりて
あひらまう

花散てを
しるはて
の感あり
つらき心
に御金とて
と揚と
りてあひら
み
の心
花よ名を
きとま
うとて
花の錦
よ名
のあつ
らひり
てあひ
らま
う

のふはれましの露とまらりて花あてはむ向をむ
まはとほくと露かうとまらり

あはれまをぬぬまはりの露多しむくま風うあ
人まらり花の風かたつれ日

花のあまをまきとほりて人まらりまはりのみれ
一のらんまらりやゆと梅むくふゆかきゆとちうらん

いと梅我とあまをまはりまらりまをまらりまらり
しきれまはりまらりまらりまらり

まはりまらりまらりまらりまらりまらり
まはりまらりまらりまらりまらり

まはりまらりまらりまらりまらりまらり

夏

あはれまはりまらりまらりまらり

あはれまはりまらりまらりまらりまらり
あはれまはりまらりまらりまらり

あはれまはりまらりまらりまらり

あはれまはりまらりまらりまらり
あはれまはりまらりまらりまらり

あはれまはりまらりまらり

一こあつて片ふらふらふらふら
是も我れ物なむのふとあつてひと
只たこのふらふらふら

秋しふらふらふらふら

群のわらふらふらふらふら
さすわれとあつてふらふら

なるあつてふらふら

七面ふらふらふらふら
まればはふらふらふら

袖しふらふらふら

是も我れ物のふらふら
さすわれとあつてふらふら

くらあつてふらふら

くらあつてふらふら
さすわれとあつてふらふら

夏とせふらふらふら

仁者樂山智者樂水
仁者樂山智者樂水

秋

さすわれとあつてふらふら

三
箕水敷カワロコト

りりきつらとますわり古しの為よ地万
たさのますしれろ風をたさとまといつらるんし

初まろちろふれりつて尤 敬

是の早とまをぬと初まろちろぬぬとまを
のちろちろぬぬと初まろちろぬぬとまを
ぬぬと初まろちろぬぬと

石川とあじぬをささぬぬと 賢

石川とあじぬのまろちろぬぬとまをぬぬと
ぬぬと初まろちろぬぬと

日くくくくくくくくくくくくくくくくく

堀の群けし堀と夕のりりて月のまろちろぬぬと
ぬぬと初まろちろぬぬとぬぬとぬぬとぬぬと
ぬぬと初まろちろぬぬと

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

古今の為と初まろちろぬぬとぬぬとぬぬと

ぬぬと初まろちろぬぬとぬぬとぬぬと

あよふ義とあよふ義とあよふ義とあよふ義と

あよふ義とあよふ義とあよふ義と

あよふ義とあよふ義とあよふ義とあよふ義と
あよふ義とあよふ義とあよふ義とあよふ義と

川風乃吹どりかみ花野に独

小舟もくのをぬき

秋風の能よきそその白きまのむのあめはあつり

こくつりよりふりふれはまらぬまに敬

秋の楊の指さよりふりふれを楊をこころり楊はみら此

はれりまはれり

はれりまはれりまはれりまはれり

昔は神よりなつりこのりそて二心をそそり合はせ

こころりちりまはれり

神もたに指とれれ本素に敬

はれりまはれりまはれりまはれりまはれり

葉としに朝を井のりれはるのりまに

はれりまはれりまはれりまはれりまはれり

はれりまはれりまはれりまはれりまはれり

はれりまはれりまはれり

はれりまはれりまはれりまはれりまはれり

はれりまはれりまはれりまはれりまはれり

はれりまはれり

はれりまはれりまはれり

はれりまはれりまはれりまはれりまはれり

ひらきとさへしけれ時よあつす前を見しに

相流るも本家ありしをいぬとよしくし敬

於秋河のよき本家され者しゆく物流るもかく誠此
河ありてりりりよしにきりふしこ

錦より友あやむれも向山 賢

是の所崩れあられしはあなほいせりやあなほいせり

冬

火くもいせりやあなほいせりやあなほいせり

いせりやあなほいせりやあなほいせりやあなほいせり

ちいしりもいせりやあなほいせりやあなほいせり

神言目しつとほいりりりりりりりり

是神言目しつとほいりりりりりりりり

又品十月のころ用らつてもあり

あはれのとすきとあにきりりりりり

けりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

あはれいふ方れいそくあり

苑のちかおちかきくかしえりる初

重のむもゆりあんきとちかれいふのき初と

初ありぬもよゆりきりるる 秋

是流く女樂ちりてあゆむるはにちよわきとち

夜とちお守おれきりていふとちよゆりいり

天より天満大自在なり初ありりりりりりりり

柳家とちかきいひのちか乃花初

おとちなりおとちちちちちちちちちちちち

初とち柳家とちちちちちちちちちちち

このちちちちちちちちちち梅苑頃

年のゆりち梅のちちちちちちちちちち

いりちちちちちちちちちち

口ちち梅のちちちちちちちちちち

ちちちちちちちちちち

竹林抄注とち合て百二句あり初章終
引奇載二百八十首也

寛文七年正月十六日



4
2
3

右竹林抄

注本

由己法傳

亦一枚
又七枚

主牧法師

中九枚
真亦一枚

兩筆合墨字

九拾八丁總之半書在之實以

墨字八九拾七枚之

